

ゾンビとわれわれ人類学者

— 感染のメタファーとその現実 —

Anthropological Zombie or Anthropology as Zombie existence



Night of the Living Dead, 1968, directed by George A. Romero

池田光穂（大阪大学）日本文化人類学会第59回研究大会（筑波大学）

分科会「複数性・複数化の人類学」（主宰：田中雅一）2025年6月8日

発表について、スライドの見方

- このスライドに含まれている文字情報の多くは予稿集に入っているものと、多くは一致しますので、発表で意味が取りづらいところは、予稿集の原稿をよくお読みください。
- スライドの全部の情報は横のQRコードにある情報でリンクするウェブページに含まれているので、お手持ちのスマートフォンでURLを取得してください。
- QRコードはここでしか入手できません。



ゾンビとわれわれ人類学者—— 感染のメタファーとその現実 ——

- 1. リアルゾンビ写真との出会い
- 2. 複数性の人類学のなかにおけるゾンビ
- 3. エージェントモデルとしてのゾンビ（→ゾンビ宣言とポストヒューマニズム）
- 4. 感染の恐怖／感染の快楽またはアイデンティティの問題
- 5. ゾンビの身体論を共有する現代人
- 6. メディアゾンビ、あるいは増殖[複数化]するゾンビ
- 7. ポストコロナルな否定の表象としてのゾンビ
- 8. 要約と結論

1. リアルゾンビ写真との出会い

- ゴラ・ニール・ハーストン(1891-1960)は、グッゲンハイム財団の支援をうけて1936年から1937年にかけてジャマイカとハイチでフィールドワークをした。その結果が翌年に出版される“Tell My Horse: Voodoo and Life in Hati and Jamaica”(邦題：『ヴードゥーの神々』)である。その中で「かつてフェリシア・フェリックス=メントールだった人の残骸（ないしはぬけ殻）」の姿を撮った写真がある。ゴナイブの病院の中庭で著者によって撮られたゾンビの写真は、病院の患者用のガウンをつけて、こちらを見据えて仁王立ちしている。ハーストンは、ゾンビを前にして、彼女[それ]にかける言葉もなく、見る以外に得られるものはなく、そしてその「生きる屍」の姿を長く見続けることはできない、と落胆しながら記述している。

Felicia Felix-Mentor as a Haitian Zombie from Zora Neale Hurston's "Tell My Horse: Voodoo and Life in Haiti and Jamaica," 1938

ゾンビと出会った人がいる。ゾラ・ニール・ハーストン (1891-1960) がその人である。"Tell My Horse: Voodoo and Life in Haiti and Jamaica," 1958のなかで、撮影に至った経緯を次のように述べている。

ハイチのポルトー・フランスで、1907年に死んだはずのフェリシア・フェリックス=メントールが、その29年後に「ここは父の農場だ。ここで暮らしていた」と呟き、裸で徘徊していたと、衛生局長リュルクス・レオンに報が入り、最終的に彼自身が診断し、施設(病院)に収監したという。



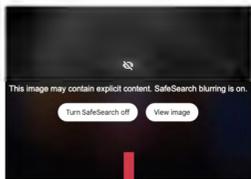
ゾラ・ニール・ハーストン



Hurston, Zora Neale: 1891-1960, from "Zora Neale Hurston Collection," by Yale University/ Hurston playing a hountar, or mama drum, 1937

https://navymuleo.sakura.ne.jp/Zora_Neale_Hurston.html

リアルゾンビとメディアゾンビの落差



Zombie Walk Paris 2017



サトウキビ畑のゾンビ 2021年5月5日にウィキペディアにULされたもの



Felicia Felix-Mentor, 撮影は1936年冬ごろと推定

ゾンビとわれわれ人類学者——感染のメタファーとその現実——

- 1. リアルゾンビ写真との出会い
- 2. 複数性の人類学のなかにおけるゾンビ
- 3. エージェントモデルとしてのゾンビ (→ゾンビ宣言とポストヒューマニズム)
- 4. 感染の恐怖/感染の快楽またはアイデンティティの問題
- 5. ゾンビの身体論を共有する現代人
- 6. メディアゾンビ、あるいは増殖[複数化]するゾンビ
- 7. ポストコロナルな否定の表象としてのゾンビ
- 8. 要約と結論

2. 複数性の人類学のなかにおけるゾンビ

- この発表は、その写真の姿に取り憑かれた私が「複数性・複数化の文化人類学」で考えられる、さまざまな問題提起に対してゾンビ的存在論 (Zombic ontology) から考察するものである。
- 「複数性・複数化の文化人類学」の課題は多様なものである (→次のページのリスト)。
- 文化人類学・民族学研究の研究上のパラドックスは、複数のインフォーマントから得た多様な情報を、民族誌を書く時には単一あるいは限定された広がりの中で限られたレパトリーの文化的表象の中に閉じ込めておく(=ethnographic freezing)ことである。
- 本分科会の主宰者(田中雅一氏)から依頼されたことは「(COVID-19でもいいが)ゾンビ現象から想定される感染前／感染後の主体のあり方や扱われ方によるアイデンティティの変化などについての考察を期待する(=要約)」というものであった。
- 医療人類学を専攻するものとして、私の役割は、現代社会における「感染のメタファー」や「ゾンビの身体論」、さらには「否定の表象としてのゾンビ」について考察することにある。

1. アイデンティティと複数性	テーマ: 多文化社会におけるアイデンティティの形成 内容: 人々がどのように複数の文化的背景を持ち、それが彼らの自己認識にどのように影響するかを探る。
2. 社会的ネットワークと関係性	テーマ: 複数の社会的ネットワークの相互作用 内容: 友人関係や家族関係がどのように重なり合い、個人の社会的地位に影響を与えるかを分析。
3. 言語とコミュニケーション	テーマ: 複数言語使用の社会的意味 内容: バイリンガルやマルチリンガルのコミュニティにおける言語の選択とその社会的・文化的影響を研究。
4. 環境と持続可能性	テーマ: 複数の生態系と人間の相互作用 内容: 異なる文化がどのように環境を認識し、持続可能な生活様式を形成しているかを探る。
5. グローバリゼーションとローカル文化	テーマ: グローバルな影響とローカルな反応 内容: グローバル化が地域文化に与える影響と、その中で複数の文化の共存を分析。
6. 性とジェンダー	テーマ: 複数のジェンダーアイデンティティの理解 内容: ジェンダーの多様性がどのように社会的な役割や期待に影響を与えるかを探索。
7. 移民と流動性	テーマ: 移民の経験と複数性 内容: 移民が新しい文化に適應する過程での複数のアイデンティティの形成を研究。

生成AI Monica による回答

ゾンビとわれわれ人類学者——感染のメタファーとその現実——

1. リアルゾンビ写真との出会い
2. 複数性の人類学のなかにおけるゾンビ
3. エージェントモデルとしてのゾンビ (→ゾンビ宣言とポストヒューマニズム)
4. 感染の恐怖／感染の快楽またはアイデンティティの問題
5. ゾンビの身体論を共有する現代人
6. メディアゾンビ、あるいは増殖[複数化]するゾンビ
7. ポストコロナルな否定の表象としてのゾンビ
8. 要約と結論

3. エージェントモデルとしてのゾンビ

- 「ゾンビ」は、ノーマルな生者を襲ったり危害を加えたりすることを通して感染、増殖する想像上のエージェント[モデル]という存在として表象されてきた。
- そこには、個性を失った複数性と[どれひとつとして似た外見が存在しない]非同一次性のテーマが伏在する(=両義的エージェント)。Lauro and Embry(2008)による"A Zombie Manifesto"(→次のスライド)を含めてさまざまな言説の議論を踏まえて、ハーストンが描写した1930年代中頃のヴァドゥー信仰を中心としたゾンビを標準的なものとして捉えよう。
- フンガン (ヴァドゥー司祭) により死体から蘇らせられ、様々なことに使役される非主体的存在(non-subjective agent)として《リアルゾンビ》考えてみる。

Sarah Juliet Lauro; Karen Embry, *A Zombie Manifesto: The Nonhuman Condition in the Era of Advanced Capitalism*. *boundary 2* (2008) 35 (1): 85–108 (1/2)

- サブタイトルに注目→高度資本主義時代における非人間的条件
- Donna Haraway, *A Cyborg Manifesto*, 1985 の影響下にある：完璧で自然な身体や主体に対するアンチテーゼ。機械との補綴や融合、モンスター的在り方の肯定、アイデンティティの可塑性などが謳われていた。
- 著者たちはサイボーグ宣言を受けて、グローバル資本主義に対するポストヒューマニズム(PH)の理論を打ち立てようとする。従前のPHを批判し、ゾンビ的存在論には主体の死が不可欠で存在論から憑在論へのシフトが想定されている。引用される議論は、PHよりもポストモダンにおける主体の死に関するものが多いと私は感じた。

Sarah Juliet Lauro; Karen Embry, *A Zombie Manifesto: The Nonhuman Condition in the Era of Advanced Capitalism*. *boundary 2* (2008) 35 (1): 85–108 (2/2)

- しかし、フンガンの呪術により死から蘇らせる奴隷としてのゾンビの議論を、生と死の弁証法で乗り越える主体構築を試みるのではない。むしろ、ゾンビそのものが否定弁証法の実践であるを通して主体／客体の二元論を拒絶し、宙吊りのままの生(と死)を肯定する。
- ゾンビを恐怖対象とする啓蒙理性を否定し、ポストヒューマン時代におけるゾンビ的現代を取り戻す。著者たちは、そのような時代は資本主義の終焉でしかありえないと、おおきく見栄を切る。
- コメント：非常に難解だが「資本主義の終焉」をめざす「死んだ主体 (Zombie proletariat?)」を撞着語法的にその革命の[不死の]主体として担わせようレトリックに満ちている、のではないか？トロツキー的なゾンビ永続革命論？

エージェントモデルとしてのゾンビの問題点

- ウィリアム・シーブルック(1929)『魔法の島：ハイチ』/ヴィクター・ハルペリン(1932)『ホワイト・ゾンビ(恐怖城)』/ジャック・トゥルヌール(1943)『わたしはゾンビと歩いた』/ジョージ・ロメロ(1968)『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』などなど小説や映画表象が大きくゾンビがテーマとして取り上げられる一方、.....
- 既出のHurst(1938), *Tell My Horse*. の他に、Melville J. Herskovits(1937) *Life in a Haitian Valley*. Alfred A. Knopf. Maya Deren (1946-1956) *Divine Horsemen*. Alfred Métraux (1958) *Le vaudou haïtien (Voodoo in Haiti, 1959)*. Gallimard. Karen McCarthy Brown (1976) *The Veve of Haitian Vodou*. など、ハイチのブードゥーを紹介した民族誌のほとんどすべては儀礼、象徴、信徒集団、憑依などがほとんどであり、Zombie 信仰はわずかに触れられるだけで、民族誌研究の中心的テーマにはなっていない。

エージェントモデルを解剖する：両義性の分析

- これもまた《リアルゾンビ》と《メディアゾンビ》の著しい落差になっている。この落差の原因は、
- 1) ゾンビ信仰がメディア的想像力の中で増殖する一方リアルなゾンビに出会えないこと、
- 2) Karen McCarthy Brown, *Mama Lola*(1991)のようにブードゥー信仰は憑依現象を含めて生きているひとたち活き活きとした宗教経験であり、エキゾチックな恐怖対象ではないこと。
- つまり《メディアゾンビ》は文脈から遊離したオカルト的ジャンルとして別の形の世界流過程に入っていることを示す (→研究領域の分業体制の確立)。

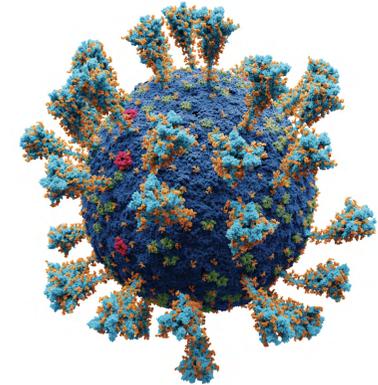
ゾンビとわれわれ人類学者—— 感染のメタファーとその現実——

- 1. リアルゾンビ写真との出会い
- 2. 複数性の人類学のなかにおけるゾンビ
- 3. エージェントモデルとしてのゾンビ (→ゾンビ宣言とポストヒューマニズム)
- 4. 感染の恐怖／感染の快樂またはアイデンティティの問題
- 5. ゾンビの身体論を共有する現代人
- 6. メディアゾンビ、あるいは増殖[複数化]するゾンビ
- 7. ポストコロニアルな否定の表象としてのゾンビ
- 8. 要約と結論

ゾンビはヒト=ヒト感染／ウイルスも同様



商業サイトのサンプル画像 <https://x.gd/sQ5ko>



<https://en.wikipedia.org/wiki/SARS-CoV-2>

4. 感染の恐怖／感染の快樂またはアイデンティティの問題

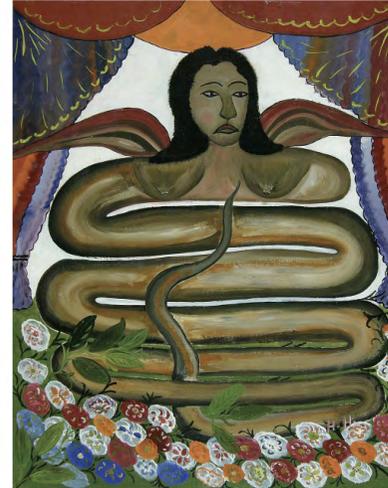
- (i) ゾンビ存在論の第一の特徴。
- ゾンビとして蘇らせる犠牲者は、年をとっていなければ誰でもいいという。生前のジェンダーや社会的属性は関係ない。その意味ではCOVID-19[=エージェント化するエージェント]の感染のように、感染のチャンスは貴賤により差別されるのではなく誰にでも起こりうる(=デモクラティックなゾンビ感染現象)。蘇らせる呪薬と墓場の土には強い結びつきがあるので、そのような汚染土に対して人は忌避心を抱く。しかし感染現象は防いでも防ぎきれない無力感がある。
- 他者との普遍的同一性——単一の犠牲者(患者)へと変えてしまうこと——への恐怖とその運命論に引きずり込むのだ。そこで人々は個別の歴史をもったアイデンティティ(内的首尾一貫性)を失い、ゾンビ(患者)としての同一性(ゾンビアイデンティティ)のもとに普遍的に統一される。

ゾンビとわれわれ人類学者—— 感染のメタファーとその現実——

- 1. リアルゾンビ写真との出会い
- 2. 複数性の人類学のなかにおけるゾンビ
- 3. エージェントモデルとしてのゾンビ (→ゾンビ宣言とポストヒューマニズム)
- 4. 感染の恐怖／感染の快樂またはアイデンティティの問題
- 5. ゾンビの身体論を共有する現代人
- 6. メディアゾンビ、あるいは増殖[複数化]するゾンビ
- 7. ポストコロニアルな否定の表象としてのゾンビ
- 8. 要約と結論

5. ゾンビの身体論を共有する現代人

- (2) ゾンビ存在論の第二の特徴
- ゾンビ化への恐怖は、元フェリシアという女性[それ]と邂逅したときにハーストンが覚えたように、両者の間のコミュニケーション不能性のなかに現れる。ゾンビの存在論の二番目の特徴は、[それは]生者か死者がわからない宙吊りの身体である。
- そのプラトンの「牢獄としての身体」の中には心というものがなく、ただ主人の言うことを聞く機械のような無機質なものにすぎない。そこには生者がもつ生々しい命の輝きがない。生と死のあいだの煉獄的状况におかれている。



ハイチの画家エクトル・イボライトが描いたロア・ダンバラ（蛇）の絵。イボライト自身もウンガン[ファンガン]であった



ベトナム戦争時代における南ベトナム軍が作ったベトナム拷問用の虎の檻の再現模型（戦跡博物館）

身体という牢獄

ゾンビとわれわれ人類学者——感染のメタファーとその現実——

- 1. リアルゾンビ写真との出会い
- 2. 複数性の人類学のなかにおけるゾンビ
- 3. エージェントモデルとしてのゾンビ（→ゾンビ宣言とポストヒューマニズム）
- 4. 感染の恐怖／感染の快楽またはアイデンティティの問題
- 5. ゾンビの身体論を共有する現代人
- 6. メディアゾンビ、あるいは増殖[複数化]するゾンビ
- 7. ポストコロニアルな否定の表象としてのゾンビ
- 8. 要約と結論

6-a. メディアゾンビ、あるいは増殖[複数化]するゾンビ

- (3-1) ゾンビの存在論の第三番目の特徴の(1)
- ハイチのオリジナルの「伝統的」《リアルゾンビ》と《メディアゾンビ》の間の著しい乖離（承前）。
- それを「ゾンビ・マニフェスト（ゾンビ宣言）」の著者たちLauro and Embry(2008)は、グローバル資本主義[の犠牲者たち]とポスト・ヒューマニズムの理論学派のあいだの両立しがたい緊張関係にあると巧みに表現している。

古典的《メディアゾンビ》としての「ナイト・オブ・ザ・リビングデッド」

Night of the Living Dead, 1968, directed by George A. Romero

『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』（Night of the Living Dead）は、ジョージ・A・ロメロが監督・撮影・編集、ロメロとジョン・ルツォが脚本、ラッセル・ストリーナーとカール・ハードマンが製作、デュアン・ジョーンズとジュディス・オディアが主演した1968年のアメリカのインディペンデント・ホラー映画。ストーリーは、ペンシルベニアの田舎町の農家に閉じ込められた7人が、生き返った死体に襲われるというもの。この映画に登場する肉食モンスターは「グール」と呼ばれているが、大衆文化におけるゾンビの現代的な描写を広めた代表作とされている。



https://navymule9.sakura.ne.jp/Night_of_the_Living_Death.html

古典としての「ナイト・オブ・ザ・リビングデッド」

Night of the Living Dead, 1968, directed by George A. Romero



開いたトラックの窓から覗き込むジュディ



農家の居間でライフルを構えるベン

https://navymule9.sakura.ne.jp/Night_of_the_Living_Death.html

6-b. メディアゾンビ、あるいは増殖[複数化]するゾンビ[承前]

- (3-2) ゾンビ存在論の第3番目の特徴[承前](2)
- 他方、隠喩としてのゾンビは、映像やドラマさらにはゲームソフトのなかで自己増殖を遂げる（福田 2024）だけでなく、時には哲学上の思考実験（Chalmers 1996）の対象になったり、挙句にはゾンビ・マニフェストの著者たちのように、ポストヒューマン時代の変革の主体になったりして資本主義体制の終焉を予見してくれる存在なのである（→ゾンビ妄想のフラクタルな増殖）。
- →マキシム・クロンプ『ゾンビの小哲学』武田・福田訳、人文書院、2019年

6-c. メディアゾンビ、あるいは増殖[複数化]するゾンビ[承前]

- (3-3) ゾンビの存在論の第三番目の特徴[承前](3)
- 《リアルゾンビ》のほうは、生きている間による経済的人的搾取にあったプレモダン時代のプレカリアートであり、死んでもなお呪術により蘇らせられて搾取可能の限界を超えて使役されるという植民地状況の過酷な現実を体現している。
- と同時に、ゾンビ奴隷は、植民地主義や人種主義という構造的暴力の必然的帰結としてのマルクス主義時代のルンペンプロレタリアートであり、ネオリベラル時代のプレカリアートそのものである。
- 隠喩としてのゾンビ表象の横溢は、メディアゾンビもリアルゾンビも、同時であり、奇妙なことに、それらの間の接点はほとんどない。
- なぜか？—表象[=ウィルス/遺伝情報]がもつ模倣的増殖の自律性?あるいは口承伝統や文芸作品における時間的にも因果関係にからも繋がりのない2つの出来事のあいだの《ひとつの関係=ミメシス》が確立したのだろうか？

奴隷貿易

1515年～1865年に数百万人が
売買され大西洋を渡った

現代のアフリカ系人口の祖先が
アフリカ出身だった割合 (%)



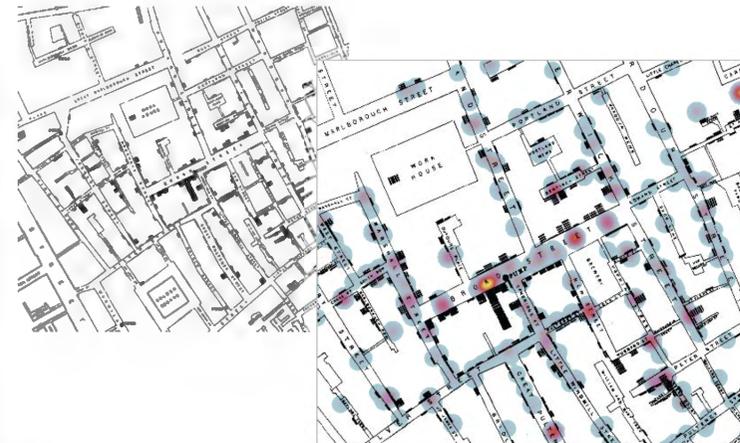
注:本研究が対象にした南北アメリカ大陸のアフリカ系住民は、
祖先の少なくとも5%がアフリカ系

出典:アメリカ大陸における大西洋間奴隷貿易の遺伝的影響、
American Journal of Human Genetics

<https://www.bbc.com/japanese/53550421>

ジョン・スノーによる1854年のロンドンでのコレラ流行の疫学マッピングをGIS
手法を使って表現したもの

<https://learn.arcgis.com/ja/projects/map-a-historic-cholera-outbreak/>



ゾンビとわれわれ人類学者——感染のメタファーとその現実——

1. リアルゾンビ写真との出会い
2. 複数性の人類学のなかにおけるゾンビ
3. エージェントモデルとしてのゾンビ (→ゾンビ宣言とポストヒューマニズム)
4. 感染の恐怖／感染の快楽またはアイデンティティの問題
5. ゾンビの身体論を共有する現代人
6. メディアゾンビ、あるいは増殖[複数化]するゾンビ
7. **ポストコロニアルな否定の表象としてのゾンビ**
8. 要約と結論

7. ポストコロニアルな否定の表象としてのゾンビ

- 最後に存在論分析に手を休めて歴史的文脈にハイチの文化表象としてのゾンビを押し返してみよう。
- 1915-1934年までの米国海兵隊の占領以降、独裁と貧困と暴力の跋扈、1980年代のエイズ流行の際のホモフォビアパニック、先の米国大統領選挙における移民への中傷など、ハイチはポストコロニアルな否定の表象の取蔵庫でありつづけてきた。
- ハイチの外でのゾンビは平和な社会の[仮想的]想像力として豊かとも言えるゾンビ研究の活況を呈している。〈発祥の地の不幸〉と〈移植先の奇妙な多幸感〉という著しい対比とその違和感の解決への模索を我々は決して忘れるわけにはいかないのだ。

オハイオ州スプリングフィールド 2024年9月

- 2024年9月、オハイオ州スプリングフィールドでハイチ系移民がペットを盗み食いしているというデマがネット上で拡散した。この主張は、地元の猫が屠殺されたという地元のフェイスブックグループの投稿から始まり、極右やネオナチのグループの間で瞬く間に広まった。その後、この主張はアメリカ右派の著名人、特に共和党オハイオ州上院議員で副大統領候補のJ.D.バンス、それに続く大統領候補ドナルド・トランプ、ローラ・ルーマーやツイッター (X) のオーナーであるイーロン・マスクなどの同盟者によって増幅された。その後、フェイスブックの最初の投稿の著者と彼女にこの話をした隣人は、話したこともない人たちからの噂に基づいていたことを認めた。

アメリカ国内における移民に対する構造的レイシズム

- ペットを食べるという主張は、最近のハイチ人の合法的な移民が公的資源を圧迫しているスプリングフィールドに存在する人種的緊張の中で広まった。
- この主張が広まった後、スプリングフィールドの学校、病院、公共施設、企業を狙った数十件の爆破予告があり、しばしばハイチ人へのヘイトメッセージが添えられていた。
- ファクトチェックのウェブサイトPolitiFactは、このデマを毎年恒例だった「今年の嘘(Lie of the Year, 2025)」に選んだ。



<https://www.pbs.org/newshour/show/politifact-lie-of-the-year-and-its-impact-on-the-ohio-town-caught-in-the-middle>

2024年9月9日、共和党が支配する合衆国下院司法委員会によるツイッター投稿。AIが生成したドナルド・トランプが猫とアヒルを抱きしめている写真と、「オハイオ州のアヒルと子猫を守れ！」というキャプションが添えられている。

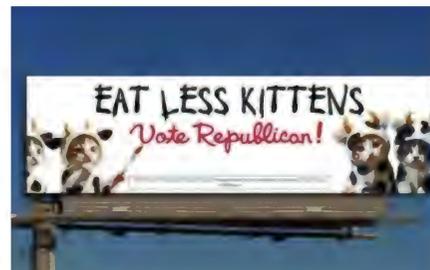
House Judiciary GOP
@JudiciaryGOP

Protect our ducks and kittens in Ohio!



3:44 PM · Sep 9, 2024 · 87.5M Views

ご注意：アメリカ共和党側のネット上でのキャンペーン映像です（リアル映像ではない）



アリゾナ州共和党は、ペットを食べるというデマを宣伝する、チックフィラ広告 (Chick-Fil-A advertising) 風の宣伝看板を依頼した

ゾンビとわれわれ人類学者——感染のメタファーとその現実——

- リアルゾンビ写真との出会い
- 複数性の人類学のなかにおけるゾンビ
- エージェントモデルとしてのゾンビ（→ゾンビ宣言とポストヒューマニズム）
- 感染の恐怖／感染の快楽またはアイデンティティの問題
- ゾンビの身体論を共有する現代人
- メディアゾンビ、あるいは増殖[複数化]するゾンビ
- ポストコロナルな否定の表象としてのゾンビ
- 要約と結論

8. 要約と結論

- ゴラ・ニール・ハーストン(1891-1960)が1936年ごろ写したと思われる「かつてフェリシア・フェリックス=メントールだった人」つまり現存した唯一のゾンビの写真との出会いを出発点にして、現代社会におけるゾンビ表象とゾンビ増殖についての感染のメタファーについて考察した。
- 本分科会のテーマである「複数性・複数化の文化人類学」のレポーターを紹介し、1) エージェントモデルとしてのゾンビ、2) 感染の恐怖あるいは快楽のアイデンティティ、3) ゾンビ身体論の特徴、4) 増殖するメディアゾンビとリアルゾンビの比較、を紹介した。
- 本発表の表題「ゾンビとわれわれ人類学者」は、そのようなゾンビを文化研究の対象にするだけでなく、ゾンビが含意するグローバル資本主義におけるプレカリアートやマルチチュードの表象としてのゾンビすなわちハイチ人の否定的な表象とわたしたちが会おう政治権力空間への反省的考察に誘うのである。

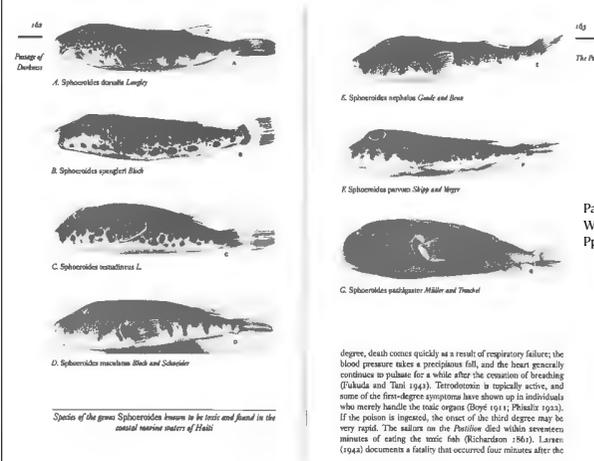


In memory of Felicia Felix-Mentor
as a Haitian Zombie

おまけ[AIにスライド情報をまとめさせたもの]

- 発表者の主張を以下の5つのポイントにまとめました。
- 1. ゾンビの存在論と文化人類学
 - 発表者は、ゾンビを「複数性・複数化の文化人類学」の観点から考察しています。特に、ゾンビ的存在論 (Zombic ontology) を通じて、感染のメタファーやアイデンティティの変化について探求しています。
- 2. リアルゾンビとメディアゾンビの対比
 - ゾンビの表象には、実際の文化的背景に基づきリアルゾンビと、メディアによって構築されたメディアゾンビが存在し、両者の間には大きな落差があることを指摘しています。この落差は、メディアがゾンビをエキゾチックで恐ろしい存在として描く一方で、実際の信仰や文化的実践が十分に理解されていないことに起因しています。
- 3. 感染のメタファー
 - 感染のメタファーを通じて、ゾンビは個人のアイデンティティを失わせ、普遍的な存在へと変化させる恐怖を象徴しています。この現象は、COVID-19のような現代の感染症とも関連付けられ、社会的なアイデンティティの変化を考察する材料となっています。
- 4. ポストコロニアルな視点
 - 発表者は、ゾンビをポストコロニアルな否定的な表象として位置づけ、ハイチの歴史的文脈や文化表象におけるゾンビの役割について考察しています。特に、米国のハイチに対する偏見や歴史的な抑圧が、ゾンビのイメージにどのように影響を与えているかを探求しています。
- 5. アイデンティティと社会的構造
 - ゾンビの存在論を通じて、発表者は現代社会におけるアイデンティティの形成や、社会的ネットワークにおける関係性の複雑さを考察しています。特に、複数の文化的背景を持つ人々がどのように自己認識を形成するかについての問題提起がなされています。
 - これらのポイントを通じて、発表者はゾンビの文化的・社会的意義を深く掘り下げ、現代社会におけるさまざまな問題を浮き彫りにしています。

ゾンビパウダーのメタモルフォシス



Passage of darkness : the ethnobiology of the Haitian zombie / by Wade Davis, Chapel Hill : University of North Carolina Press, Pp.162-163, c1988

degree, death comes quickly as a result of respiratory failure; the blood pressure takes a precipitous fall, and the heart generally continues to pulsate for a while after the cessation of breathing (Tukalo and Tani 1941). Tetradotoxin is typically active, and some of the first-degree symptoms have shown up in individuals who merely handle the toxic organs (Drey 1911; Phelan 1921). If the poison is ingested, the onset of the third degree may be very rapid. The sailors on the *Porillon* died within seventeen minutes of eating the toxic fish (Richardson 1861). Larrea (1942) documents a fatality that occurred four minutes after the